

きのこん先生の音読レッスン

レッスン3 家庭学習研究社ジュニアスクール

組

番

名前

はだかの王さま

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

むかしむかし、とある国のある城に王さまが住んでいました。王さまはぴっぴかの新しい服が大好きで、服を買うことばかりにお金を使っていました。

ある日、二人のさぎ師が町にやって来ました。二人は人々に、自分は布織り職人だとウソをつきました。それも世界でいちばんの布が作れると言いはり、人々に信じこませてしまいました。



「とてもきれいな色合いともようをしているのだけれど、この布はとくべつなのです。自分にふさわしくない仕事をしている人と、バカな人には見えない布なのです。」と、さぎ師は言います。

その話を聞いた人々はたいそうおどろきました。たいへんなうわさになって、たちまちこのめずらしい布の話は王さまの耳にも入りました。

「そんな布があるのか。わくわくするわい。」と、服が大好きな王さまは思いました。

「もしわしはその布でできた服を着れば、けらいの中からやく立たずの人間や、バカな人間が見つけられるだろう。それで服が見えるかしこいものばかり集めれば、この国ももつとにぎやかになるにちがいない。さっそくこの布で服を作らせよう。」

王さまはお金をたくさん用意し、さぎ師にわたしました。さぎ師はよろこんで引き受けました。部屋にはた織り機を二台ならべて、すぐに仕事にとりかかりました。でも、はた織り機には何もありませんでした。それでも、さぎ師はいっしょうけんめい布を織っていました。いいえ、ちがうのです。ほんとうは布なんてどこにもなくて、からののはた織り機で織るふりをしているだけなのです。

しばらくすると王さまは、ほんとうに仕事がかどっているのか知りたくなってきました。自分が見に行つてたしかめてもいいのですが、もし布が見えなかつたらどうしようと思いました。そこで、王さまは自分が行く前に、けらいをだれか一人行かせることにしました。けらいに布がどうなっているかを教えてもらおうというのです。

そこで王さまは、けらいの中でも正直者で通っている年よりの大臣を向かわせることにしました。

この大臣はとても頭がよいので、布をきつと見ることができらるだろうと思つたからです。向かわせるのにこれほどぴったりの人はいません。



人のよい年よりの大臣は王さまに言われて、さぎ師の家へ向かいました。

「神さま、助けてください！」といのりながら、両目を大きく見開きました。けれども、何も見えません。はた織り機には何もありません。

「ど、どういうことじゃ」と思わず口に出しそうになりましたが、しませんでした。

そのとき、「大臣さん、」とさぎ師が声をかけました。

「どうです？ もっと近づいてよく見てください。このもよう、いろいろな技術が使われていてすごいですし、この色合いだって美しく、思わずうなってしまいそうですし、う？」

さぎ師はそう言って、からののはた織り機をゆびさしました。大臣はなんとかして布を見ようとしましたが、どうやっても見えません。だって、そこにはほんとうに何もありませんから。

「大変なことじゃ。」と大臣は思いました。自分はバカなのだろうか、と首をかしげました。でもそう思いたくありませんでした。大臣はまわりを見まわしました。二人のさぎ師がいるだけです。よいことに、まだ自分が布が見えない、というのを誰も気がついていません。『見えない』、と言わなければ誰も気づかないのですから。

「あのう、どうして何もおっしやらないんですか？」
と、さぎ師の片われがたずねました。

急に言われて、大臣はあわてました。

「ああ。とてもきれいで、たいそう美しいもんじやなあ。」
大臣はメガネを動かして、何もないはた織り機をじっくり見ました。

「なんとみごとな柄じゃ。それにこの色のあざやかなこと！
このことを王さまに言えば、王さまもきつとお気にめすじやろうなあ。」

「その言葉を聞いて、ありがたきしあわせです。」
二人のさぎ師が口をそろえて言いました。

街はそのめずらしい布のうわさでもちきりでした。うわさがどんどんもり上がっていくうちに、王さまも自分で見てみたくなってきました。日に日にその思いは強くなるのですが、いっこうに布は完成しませんでした。王さまはいてもたってもいられなくなって、たくさんの役人をつれて、二人のずるがしこいさぎ師の仕事場に向かいました。

さぎ師の仕事場につくと、二人はいっしょうけんめいに働いているふりをしていました。
「さあどうです、王さまにぴったりな、たいそうりっぱな布でしょう？」
前に来たことのある役人がみんなに向かつて言いました。

でも……

「なんだこれは？ 何もないじやないか。」



と、王さまは思いました。王さまは自分がバカかもしれない
と思うと、だんだんこわくなってきました。また、王さまに
ふさわしくないかと考えると、おそろしくもなってきました。
王さまのいちばんおそれていたことでした。

だから、王さまはさぎ師たちを見て言いました。

「まさしくそうであるな。この布がすばらしいのは、わたし
もみとめるところであるぞ。」

王さまはまんぞくそうにうなずいて、からっぽのはた織り
機に目を向けました。何も見えないということを知られたく
なかったので、からっぽでも、布があるかのように王さまは
見つめました。同じように、王さまがつれてきた役人たちも
見つめました。王さまが見ているよりもっと見ようとしま
した。でもやっぱり、何も見えてはいませんでした。

「これは美しい、美しい。」

役人たちは口々に言いました。

「王さま、この布で作ったりっぱな服を、

ちかぢか行われる行進パレードのときに

おめしになってはどうでしょう。」

と、誰かが王さまに言いました。そのあと、みんなが「これ
は王さまにふさわしい美しさだ！」とほめるものですから、
王さまも役人たちもうれしくなって、大さんせいでした。



パレードの行われる前日の晩のこと、さぎ師たちは働いて
いるように見せかけようと、十六本もの口ウソクをともして

いました。人々は家の外からそのようなすを見て、王さまの新しい服を仕上げるのにいそがしいんだ、と思わずにはいられませんでした。さぎ師はまず布をはた織り機からはずすふりをしました。そしてハサミで切るまねをして、糸のない針でぬい、服を完成させました。

「たった今、王さまの新しい服ができあがったぞ！」

王さまと大臣全員が大広間に集まりました。さぎ師はあたくも手の中に服があるように、両手を挙げてひとつひとつ見せびらかせました。

「まずズボンです！」

「そして上着に！」

「最後にマントです！」

さぎ師は言葉をまくしたてました。

「これらの服はクモの巣と同じくらいかるくできあがっております。何も身につけていないように感じる方もおられるでしょうが、それがこの服がとくべつで、かちがあるといういわれなのです。」

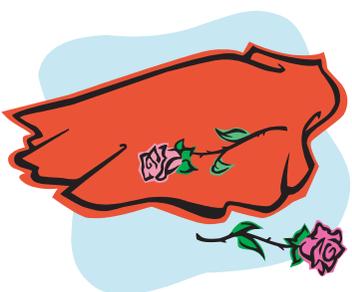
「まさしくその通りだ！」

大臣はみんな声をそろえました。

「どうか王さま、ただいまおめしになっている服をおぬぎになつて下さいませんか？」

さぎ師は言いました。

「よろしければ、大きながみの前で王さまのお着がえをお手伝いしたいのです。」



王さまはさっそく服をぬぎました。二人のさぎ師はあれやこれやと新しい服を着つけるふりをしました。着つけおわると、王さまはあちこちからかがみにうつる自分を見ました。

「何と美しい！ ……よくおにあいです！」

その場にいただれもがそう言いました。

「この世のものとは思えなく美しい柄、言いあらわしようのない色合い、すばらしい、りっぱな服だ！」と、みんなほめたたえるのでした。

そのとき、パレードの進行役がやって来て、王さまに言いました。

「行進パレードに使うてんがいが準備できました。かつぐ者たちも外でいまやいまやと待っております。」

「うむ、わたしもしたくは終わったぞ。」

と、王さまは進行役に答えました。

王さまはきらびやかなてんがいの下、どうどうと行進していました。人々は通りやまどから王さまを見ていて、みんなこんなふうにさげんでいました。

「ひゃあ、新しい王さまの服はなんてめずらしいんでしよう！ 本当によくおにあいだこと！」

だれも自分が見えないと言うことを気づかれないようにしていました。自分は今の仕事にふさわしくないだとか、バカだとかいうことを知られたくなかったのです。ですから、今までこれほどひょうばんのいい服はありませんでした。



「でも、王さま、はだかだよ。」

とつぜん、小さな子どもが王さまに向かっ言いました。

「王さま、はだかだよ。」

「……なんてこった！ ちょっと聞いておくれ、むじやきな子どもの言うことなんだ。」

横にいたそのこの父親が、子どもの言うことを聞いてさげびました。そして人づたいに子ども言った言葉がどんどん、ひそひそとつたわっていきました。

「王さまははだかだぞ！」

ついに一人残らず、こうさけぶようになつてしまいました。王さまは大弱りでした。王さまだつてみんなの言うことが正しいと思つたからです。でも、いまさら行進パレードをやめるわけにはいかないと思つたので、そのまま、今まで以上にもつたいぶつて歩きました。めしつかいはしかたなく、ありもしないすそを持ちつづけて王さまのあとを歩いていきましたとさ。